
大切な人

ラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大切な人

【Nコード】

N1669F

【作者名】

ラン

【あらすじ】

お嬢様の鈴が初めて恋をすることをしり大切な人と幸せになっていくハッピーラブストーリー

大切なあなたへ

中学二年の春

私は始めて恋をした私は世界でも有名な水島家の長女
私は生まれたときから親に決められた婚約者がいた。
でも、私は始めて恋をした。

「鈴様今日のスケジュールですが」

「ねー少し疲れたわ」

「でしたら飲み物でも」

私に自由なんてなかった親に決められたことを毎日同じようにこな
してきた・・・

「危ない」

「え、」

これが彼との初めての出会いだった

「大丈夫でしたか」

「えー大丈夫よ」

「本当にすみません」

「鈴様お怪我は」

いつも私は守られてばかりだ・・・

「平気よ」

「あなた鈴様に何かあったらどうするおつもりですか」

「お黙りなさい」

私は自分がずっと嫌いだった守られてばかりでただ親のいいなりに
なって「すみませんでした」

無礼なことを言ってしまったってあなたのお名前は？」

「飛鳥光です」

「水島鈴です」

初めてだった自分からこんなにも不思議な気持ちで相手に接したの
は・・・「では失礼いたします」

彼は笑顔で手を振ってくれた。

私は人と話したりすることは毎日のようにあるのにこんなにも楽しかったのは、初めてだった。「鈴様学校です」

私にとって毎日が憂鬱だった・・・

学校へ行っても水島家の娘としか見てくれないからとても嫌だった・

どこへ行っても水島家の娘としか見てもらえない

どうして私は普通の女の子として友達と遊んだり話したりしたいのに・・・

「あれ君は昨日の」

「飛鳥様」

「飛鳥様なんてガラじゃねーよ」

まさか会えるなんて
思ってもみなかった

「こんなところで何してんだ」

「学校へ行く途中です」

「ヘーどこ中」

「雪白学院です」

「マジで雪白って

セレブ学校じゃん」

「私の家有名らしいから」

「ふーんでも

水島さんって普通の女の子と変わらないよ」

私は彼の言葉に涙が

とまらなかった。

彼は私が落ち着くまでそばにいてくれた。

「落ち着いた？」

「ごめんなさい私ったらご迷惑を」

「大丈夫だよ」

私は彼に私の家のことを話した。

「そっかつらかったな」

「私にこんなふうに接してくださったのは飛鳥様が初めてなんです。いつも水島家の娘としか見られませんでしたから」

「じゃー改めて飛鳥光です光って呼べ」

「水島鈴です」

光様」

「様はなし」

「じゃー光君」

「なんだ鈴」

「私の名前」

「嫌だったか」

「うんうれしい」

「え、鈴」

とってもうれしかった初めて私のことを

水島家の娘ではなく

水島鈴として見てくれる人がいるって初めて知りました。私たちは休みの日に

よく会うようになりました。

「鈴走るとこけるぞ」

「平気よきゃっ」

「鈴たくあぶねー」

「ごめんなさい」

「ほら手かせ」

「え、」

「つないでたら転ばないだろ」

「はい」

光君と会っているときだけが私にとっての一番の楽しみだった。

「じゃーまたな」

「今日はありがとう」

彼がいなくなるのが不安でたまらなかった・・・

「鈴」

「ごめんなさいなんでもないの」
こんなにも悲しいなんて彼がいなくなってしまうんじゃないかとそんな気がした

「鈴俺はいつだって

お前のそばにいる」

彼の言葉が何よりもうれしかった。

大切な人

「鈴様どちらへ行かれてましたんですか」

「ちょっと買い物よ」

「困りますお一人で動かれますともしものがあったら」
家に帰っても自由はなかった・・・

それから数日後

「鈴ただいま」

「お母様お帰りなさいお父様も」

「元気にしてたかい」

「えーとっでも」

「今日はお前にいい話がある」

「いい話？」

「あーごらんおまえの婚約者だ」

いきなり何を言い出すのかと私はそう思った。

「何を言ってるの私まだ中学生だよ」

「だからだよこの方は父さんの友人の息子でお前のことを気に入ってくれたそうだ」

「いや・ぜったにいや」

「鈴待ちなさい」

何が婚約者よ

私の気持ちなんて知ろうともしないで

「鈴じゃないか」

「光君私どうすれば」

「ん、ここは」

「気がついた」

「光君私」

「心配しなくてもいいここ俺んち」

「私ごめんなさい」

「いいよゆつくり休むといいよ」

「光はいるわよ」

「俺の母さん」

「はじめまして光の母です」

「はじめまして水島鈴です」

「ゆつくりして行ってね」

「すみませんご迷惑をおかけしてしまっ」

「いのよ」

「もしもし」

「鈴どこにいるの」

「帰ってらっしゃい」

「嫌です絶対に帰りません」「何かあったのか」

「お父様が婚約者だって写真を見せられて私好きでもない人と結婚なんてしたくないのに」

「そっか俺んちだったらいつまでもいていいぞ」

「でも迷惑じゃないの」

「ばーか気にすんなって」

「ありがとう」

「今日はゆつくり休め」

「うんありがとう」

次の日

「ふぁーねむ」

「こら光何してるの遅れるわよ」

「私が起こしてきます」

「ごめんね」

「光君おくれるよ」

「鈴なんで」

「学校遅れるよ」

「あーサンキュー」

「みんなご飯よ」

こんなにも暖かい家族がいるなんて私にとっては何もかもが初めてだった。

「みんな紹介する友達も水島鈴さんだ」

「はじめまして水島鈴です今日からよろしく願いします」

「ヘーアニキの友達なんだかわいいじゃーん」
ピンポーン

「あら、だれかしら」

「あのこちらに水島鈴様が来てると思うんですが」

「あー水島さん」

「お嬢様お持ちいたしました」

「ありがとうございます」

「失礼」

「お嬢様ってどうゆうこと」 「私は水島グループの娘です」

「水島グループって世界的有名な」

「はいそうです」

「ゆっとくけど鈴は鈴だから」

「光君ありがとう」

私はしばらく光君の家にお世話になることになりました。
それから数日後

「あの陸いますか」

「あがって」

「おい陸お前姉ちゃんなんていたか」

「アニキの友達数日前から一緒に住んでるんだ」

「それにしても美人だな」

「陸君入ってもいいかしら」

「どうぞ」

「ジュースお母様からよ」

「サンキュー紹介する俺の友達の海斗と雷斗」

「はじめまして水島鈴です」

「鈴でかけるぞ」

「すぐ行く」

「なー鈴さんって光先輩の彼女」

「さー分かんないアニキは友達だって言ってた」

「あれ光じゃねーか」

「おー海じゃねーか」

「あれ、その子もしかして彼女」

「ばか友達だよ」

「ふーんまーいいけどまた学校で」

「わりーあいつ学校のダチで」

「うんん光君が楽しかったらそれでいいよ」

俺はまだきずいていなかった本当の気持ちに女子とあんまり接したことのない俺には鈴が何がうれしいのかとかよく分からなかったでも鈴の笑顔を見ていると心からホッとした。

「お嬢様だんな様がお待ちです」

「嫌はなして」

「はなせよ嫌がってるだろ」

「光君大丈夫」

「こっち急いで」

「つかまえろ」

「ここなら大丈夫だろう」

「ごめんね迷惑かけて」

「いいって」

「私帰るこれ以上光君やご家族の方にめいわくかけられないもん」

「何言ってるんだよ」

「私が婚約さえすればいいだけのこと」

「お前はhそれでいいのかよ」

「私とっても楽しかったありがとうさようなら」

「鈴待てよ」

「出してちょうだい」

「よろしいのですか」

「いいから早く」

「くそなんでだよ」

水島家

「ただいま戻りました」

「まったく心配かけて」

「申し訳ありませんでした」

「婚約の話しだが今度の日曜ホテルでパーティーがあるそこでせいにしきに発表する大丈夫きつと幸せになるさ」

これは罰だと思った。逃げ出しているんな人に迷惑かけてわたしは涙がとまらなかった・・・

そして婚約発表の日がやってきた

「鈴こちらがお前の婚約者の西条勇斗くんだ」

「はじめまして西条勇斗です」

「水島鈴です」

「美人でいい娘じゃないか」

「勇斗くんもカッコよくなって」

「少し外へいきませんか」

「えー行きましょ」

「まさかこんなかわいい人だったなんて」

「お上手なのね」

「本当ですよ。僕たちは中学生だから結婚なんてまだまだだけど君となら幸せになれるよ」

とてもやさしくて私にはもったいないくらいの人だった。

なのに光君と過ごした日々が頭から離れない私は自由なんてなかったじゃない

私が彼と婚約すれば誰にも迷惑かからない私が我慢すればいいことなのに・・・

「どうされたんですか」

「いいえ何でもありません」

「何が何にもありませんだそんな顔して」

「誰だね君は」

「通りすがりのただの中学生です」

「光君何しに来たのよここはあなたみたいなのが来れる場所じゃないのよ」

「知るかそんなもんお前こそ何のつもりだよ勝手に出て行きやがって」

「だってそうするしかないじゃない」

「勝手に一人で決めて」

「私は彼と婚約するのもうほつというて」

「そんな顔で言われても信じれねーな」

「なんで来たのよはじめから出会わなければこんなにつらい思いはしなくてすんだのに・・・」

「わりーけどこいつをあんたと婚約させるわけにはいかないんだよ」
「ちょっときや何するの」

「逃げるんだよその服じゃ走れないだろ」

「何言ってるのこんなこととしてせっかく私が」

「まったくほんと目が離せねーやつ」

「待てこいつ」「やべ見つかった」

「どうして私のためにそこまでしてがんばるのよ・・・」

「は、は、ここまでくれば大丈夫だろう」

「さよならって言ったでしょ」

「俺は聞いてない」

「なんでよ、なんで・・・」

「俺さー鈴に出会えてよかった」

「え、何を言ってるの」

「だって出会ってなかったらこんなにも楽しい毎日なんてなかったもん」

「ばか」

「ばかだとせっかく助けてやったのに」

「ありがとう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1669f/>

大切な人

2010年10月31日13時48分発行